

第1章

概 要

原 順 子

(1) 目的

グローバル拠点は「仮説Ⅲ－国内外にグローバル拠点を形成し、効果的に活用することにより、自らの考えを適切な方法で論理的に他者に表現し、勇気と判断力を身につけることができる。」という仮説に基づいて計画、実践している。目的は、研究開発単位Ⅰ、Ⅱをより深め、実践することである。3年次は研究開発Ⅰ「総合人間科」と相乗効果をあげることを目的に取り組んだ。

(2) 実践方法

対象生徒は「グローバルコミッティ」に所属する生徒である。このコミッティは国内拠点、海外拠点に参加を希望している生徒が任意で申し込み、授業後に不定期で活動をしている。「総合人間科」との関係性を強くするという目的に照らして、今年度は募集する時点で「総合人間科」で探究しようと知るテーマでレポートを書かせ、コミッティに参加する目的意識を高めさせた。

(3) 内容

1) 国内拠点－名古屋大学を拠点とするコミッティで、初年度から活動している「グローバルディスカッション」(今年度のテーマは『自由主義経済と保護主義経済の衝突～日本はどうあるべきか～』)に加えて、今年度は名古屋大学男共同参画室He For Sheからイベント参加の誘いがあり、ジェンダーに興味のある生徒を募り、20人ほどで探究し、発表を行った。

2) 海外拠点

①アジア(モンゴル)名古屋大学事務所を拠点とするコミッティ－新モンゴル高校とのTV会議を今年度も継続することが出来ている。冬の水質検査や大気調査も、新モンゴル高校で定着をした。また、今年度は生徒個人の研究テーマをTV会議で取りあげた。

②北米(NU-Tech)を拠点とするコミッティ－

初年度から継続してNC高校生と課題研究を行っている。今年度はNCにある大学(NC州立大学等)からコメンテーターを招くことが出来、現地の高校生との協同研究発表を評価してもらうことが出来た。



講評を頂く生徒たち @チャペルヒル高校

(4) 検証評価

総合人間科とリンクすることは3年目にしてようやく定着した。しかし、個人により深まりが異なった。国内拠点は1つのテーマで生徒を募集するので、テーマに興味を持つ生徒が集まり、総合人間科との相乗効果が見込まれる。海外拠点は現地に日程・人数の都合で、必ずしもコミッティの生徒全員が行けるとは限らないので、研修を活かせる生徒とそうでない生徒が出た。全員に効果があったことは、コミッティの生徒は「テーマを決めてからの現地での活動」というより、「コミッティに参加して、テーマを見つけることが出来た」ことであった。(文責 原 順子)